

田川誠一氏（元新自由クラブ代表）に聞く

# 大平首班指名と連立問題

―聞き手・川内一誠



大平首相と新自由クラブ党首として予算案の審議について意見交換する田川誠一衆議院議員（1980年3月8日・院内大臣室）

## 日中国交正常化には池田・大平が前向き

—— 田川さんは古くから日中問題に取り組んでこられた。日中国交正常化の時、外務大臣を務めた大平さんを田川さんはどのように見ていたかをうかがいたいと思います。日中関係は一九七二年（昭和四七年）七月七日、田中（角栄）内閣が発足した前後から、正常化の動きがにわかに具体化したかのように思われますが……。

田川 田中内閣になってから急に国交正常化の空気が強くなったというわけではないんで、やっぱり国際情勢の変化ですね。田中さんと大平さんのコンビが非常に良くて……。田中さんは非常にせっかちなものだし、大平さんが中国問題に積極的だったところから、国内的にはかなり促進されたのだろうけれど、一番の原動力はアメリカのキッシンジャー補佐官やニクソン大統領の訪中で中国との意見を聞かれたことも決定的なことですね。また国連に中国が迎えられたということが、決定的なものだと思っんです。

やっぱり大平さんが前向きだというのは、池田（勇人）さんが前向きだった。池田さんが松村（謙三）さんを相当バツクアップしたんです。松村さんの三回目の訪中でＬＴ貿易（廖承志氏と高崎達之助氏との間に交された民間貿易協定）ができたが、あれは池田さんのお墨付きがあったからです。それを大平さんはつかんでいたのではないですか。そう積極的に大平さんに接触したわけではないが、孫平化氏や尚向前氏と会ってもらおうとしたんだけど。

大平さんを本当の政治家だと思ったのは、首脳会談にいよいよ向う直前、自民党の中に日中国交

正常化協議会が作られ党としてもやるうとした時に、当時は正常化という言葉は使いませんでした、日中正常化を阻止しようという、それは台湾を切り捨てることになるので困るといふ、灘尾（弘吉）さんはじめ台湾につながる人たちの強い反対があったわけです。土壇場で外務大臣の大平さんが、めちゃくちゃにやられた。それはひどい罵詈雑言を浴びせられたんです。

——親台湾派の大平攻撃は、かなり激しかったですね。

田川 物事をはっきりおっしゃらない大平さんが、日中復交三原則をピタリと言った。「中国北京政権を認めれば台湾と断絶せざるを得ない」とはっきり言った。それを堂々とおっしゃったことは、私どもばかりでなく冷静に情勢を見ていた人たちも大平さんを見直したと思いますよ。大平さんは田中さんの後を継ぐ。数年前から総裁を狙ってましたからね。次の総裁を狙い、次の政権に非常に近づいてきつつある人が、党内に敵を作ることもしとわなくて、自分の信念を貫ぬこうとした勇氣にほれこみました。

ずっと先になるけど新自由クラブで四十日抗争に直面して、福田が大平かで首班指名をやるとき、新自由クラブの中で私ばかりじゃない、河野洋平君などもそうなんだけど、社会党その他の野党と同じように、筋ばかり通そうとしてもだめだ。福田が大平か、どっちかになるわけだから、大平になつたほうが開けた外交、自由な政治の方向に持つていけるのではないかということ、当初から方針を決めていた。その原動力は大平さんの勇氣だな。（日中の）促進派ということだけではなくて、共通の目的を持っていたこと。その目的を達する大平さんの信念を強く感じた。大平さんのほうもそれを感じ取ってくれていたんだね。

実

——正常化交渉の前、具体的にはどんな動きがあったのですか。

田川 古井（喜実）さんが大平さんと懇意だったので、大平さんが中国へ行く場合、スムーズに行くように地ならしだけはしておこうと話合っていた。また大平さんを通じて外務省の事務当局に、とんちんかんなことをやらないようハツパをかけておいた。一つ一つは覚えていませんがね。

——孫平化氏がきた時、現職の外務大臣、総理大臣と相次いで会談していますが、国内的に問題はなかったのですか。

田川 もうその時は問題はありませんでした。上海バレエ団の団長という口実をつけてやってきたのだが、田中と大平を中国に非公式に呼ぼうということですから……。

——田中訪中が決つてから、とんとん拍子にことが運んで行きますね。

田川 ネットクになっていたのは台湾の扱いですね。戦争の終結の解釈が一番、問題になった。日本の外交論から言うと、戦争は日華平和条約で終わっているわけですね。中国側の認識から言うと、日華条約は過去のもの、虚構という。外務省は、このことに非常にこだわっていた。向うへ行つてから首脳会談でも話になつたらしい。

——高島（益郎）条約局長が周恩来首相から「法匪」と、きびしい言葉を浴びせられたということですね。

田川 要するに理論ばかり言っているということでしょう。そこで中国はつまい言葉を考えた。それが正常化なんですよ。それまでは不正常な関係だった。それが正常になるということから、正常化という言葉が歩き出した。正常化というのは周恩来首相が言い出したのです。周りの人が考えたのか、

周首相自身が考えたのか知りませんが、周首相の口から出たんです。

——中国は正常化を急いでいたようですが……。

毛沢東主席が「賠償を取らない」と言った

田川 中国はあの時は積極的で、妥協するところはする、譲れるものはどんどん譲ろうと、もちろん一線は画すけれど譲れるところは譲ろうという態度だった。あのころ中国側が我々にさかんに言っていたことは、田中さんがくれば恥をかかせないよと言っていた。問題の一つは賠償ですよ。私なんか、いや私ばかりじゃない中国との国交回復にたずさわった政治家もそうだし、政治家以外の大部分の人たちが、何とか賠償を取らないようにしてもらいたいとひそかなる期待を持って、直接には言わないが遠回しにはそうしてほしいと思われよう言動をしていたけど。今になって思えば間違っていたな。払うものは払っておいた方が良かったと後悔していますがね。その時、聞かないうちに向うは賠償を取らないと言った。

——どうい席ですか。

田川 それは毛沢東主席の言葉ですよ。毛主席は戦争に対する賠償はまた戦争を起こすことになる。第一次大戦の時に連合国はドイツに対し過酷な賠償を取った。それがドイツをヒトラーの台頭から軍国主義にして、第二次大戦の引き金になった。だから賠償は良くないものだといいことを毛主席は教訓としてのこしていると言う。だから賠償を取らないよとは言わない。賠償を取るとすればこのくらい。何兆円と言ったかな、額は忘れてしまいましたが、当時の日本の経済からすると相当な額だった

実 ですよ。我々ではできれば払わないですむようにしたいと思つてましたが、田中内閣ができてからは大  
就 体取らないだろうという見通しでした。田中さんや大平さんにも、中国は賠償を要求しないだろうと  
華 いう見通しは入れておきましたがね。

去 ————そこで田中さんと大平さんが北京へ乗りこんで行くことになるわけですが、その直前、周恩来  
首相が公明党の竹入（義勝）さんと長い時間、話していますね。

田川 中国はルートを竹入さん、松村ライン、佐々木（更三）さんと、いくつも持っていた。佐々  
木さんはかなり信頼されてましたね。公明党はああいふ池田大作氏を頂点として誰と話しても同じこ  
とを言うから信頼してたんだよ。中国共産党と同じようなものだから。竹入さんは松村（謙三）先生  
のことをあまり言わないけれど、最初に中国と接触した時は松村先生の紹介ですよ。松村先生に頼む  
以外ないということで、竹入君と矢野（絢也）君が私の所へ来て、松村さんと池田氏を会わせました。  
公明党のことは中国側から随分、聞かれましたよ。不可解だということで、初めはあまり信頼してな  
った。ところがだんだんと話しているうちに考え方が大体同じだし、それに体質が同じだと。社会党  
や自民党は大政党だけれど、言うことが当てにならないと。党内の考えが皆、違うから。その点で公  
明党に信頼を置いていたのは、間違いないですよ。

———公明党が信頼されていたのは分かりますが、古くから中国側と関係の深かった田川さんや佐々  
木さんをさしおいて、公明党に大事なことを頼むという中国側のやり方は、納得できないんです。

田川 そうじゃないんですよ。同じことを我々にも佐々木さんにも言っていた。あの時は佐々木さ  
んも、田中さんに直接、会っていたでしょう。

——あの二人は仲が良いですかね。

田川 そうそう仲が良い。私なんか主として古井さんが大平さんに言い、大平さんが田中さんに伝えるという形でした。私も田中さんとじかに二、三回、会いましたけど、田中さんは「外交は全部、大平君に任せてある。中国問題は俺はわからんから全部、大平君に任せてある」と言っていた。大平さんも、田中さんとは対等に口をきいていましたね。だから公明党の情報だけが、政府に入ったということではない。北京は非常に慎重で、中国と違つて日本は自由主義の国だから、よほどあちこち糸をたぐつてみないと、日本国として日本政府として、どれだけ本気にしていいか分らないからと、いろんな方面に網を張つて情報を確実にしたいということじゃないですか。中国の情報力は相当なものですよ。あらゆる方面の情報をさぐつて、そりゃ大したものですよ。政治記者がいろんな所から情報をたぐつて、裏付けをとつたりするのと同じです。それを国が行っている。

——自民党内の動きなども、良く分かつていたのでしょうかね。

田川 向こう側は知らん顔をして私らの話を聞いていましたが、かなり知っていましたよ。私なんか今だから言いますが、孫平化氏に手紙を出して情報を伝えていました。控えは残してあります。

——中国はなぜあの時、正常化を急いだのですか。

大平外相は事務当局を信頼しなかった

田川 ソ連ですよ。ソ連はもう当てにならない。日本の経済力を利用して力をつけなければならぬ。国をもっと強固なものにしようということでしょう。あのころはソ連に強い反発を持っていたし、

実ソ連は中国に應じなかつたからね、そういう面で正常化を急いだのでしよう。経済的な意味合いが大  
就きかつたのではないでしようか。私なんかからみたら現実主義だね。世界情勢に應じてうまくやって  
華るよ。日本のほうが正直だよ。大平さんは外務省の事務当局をあまり信頼していなかつたね。外務省  
去は現状維持派だつたからね。前の年の国連代表権問題も情勢を間違えてね。

——重要事項指定方式ですね。

田川 必ずしも台湾に対する情誼ばかりじゃないんで、ああいう結果になると予想できなかったん  
じやないんですか。きわどいところで勝てる、中国の国連加盟を阻止できる、と判断したのでしよう。

——アメリカも北京政府の国連加盟は先送りしたい、という態度だつたのではなかつたのですか。

田川 そういう気持ちはあつたでしょうが、やっぱり世界の情勢を見ると自由主義陣営の中で中国  
を承認する国はどんどんふえてきているのですよ。そういう情勢を見て、いつまでもそのままにして  
おくことは、世界の情勢に後れをとると判断したのではないでしようか。アメリカが指導的立場を維  
持していくためには、世界情勢の流れに棹さしてはいかんといいるところがあつたのでしよう。

もう一つは対ソビエトですよ。敵の敵は味方というやつですよ。もつと元を正していくと、中国と  
アメリカは戦友だもん。日本の中国侵略に対して、アメリカは中国を助けましたからね。当時は国民  
政府だつたけど……。一番良い例は、中国の外交を預かる人達で優秀なのは皆、対米関係です。対日  
関係はアメリカより劣っていると私は見ています。

——社会党の浅沼（稲次郎）委員長が訪中したとき、「アメリカ帝国主義は日中共同の敵」という  
共同声明を出したことがありますか……。



田川 それは日米安保の一時期だな。朝鮮戦争をきっかけに日米安保体制が強化され、中国にとって武力的脅威が出てきてしまった。これは一時期のことで、アメリカに対する戦友というところさえ方は、血の流れみたくにあるのではないだろうか。

——次に四十日抗争について伺います。同じ自民党の中から大平、福田と二人の候補者が首班指名に出るといふ、まったく異例の事態になったわけですね。新自由クラブの幹事長だった田川さんも、さまざまな働きかけがあったと思いますが……。

#### 四十日抗争では双方から働きかけがあった

田川 ありました。福田さんのほうからもありました。新聞はそっちのほうは書かなくて、大平さんのほうばかり書いていましたが、双方同じくらいありました。僕らが見通しを誤ったのは憲政の常道からいって、議会政治の中で同じ政党から二人の候補者が出て本会議で首班指名で争うなどということは、夢想だにできなかったことです。本会議で首班候補に立つものがあれば、まず党内で処理して一本化するのが憲政の常道なんです。とことん争うということになれば、当然、分裂ですよ。私どもは当然、自民党は分裂するだろうと思っていました。私らだけじゃない、マスコミも国民も政治評論家も見通しを誤った。それが二人とも出ちゃった。想像外のことでは分裂すると思っていた。しかし、時間が経っても分裂する気配はない。

私のほうは福田と大平を比べれば大平のほうが良い、という一つの好みはあった。その一方で自民

党を分裂させなければならぬ、という一種の期待感もあった。そういう面では福田さんのほうがその気になれば、バックアップしてもいい。福田さんが党を出れば、我々は声援を送ろうということ、この考えは福田さんにも伝えていました。しかし本当に党を割るという感触は、伝わってきませんでした。出る気はないんですね。出る気はなくて、協力してくれとだけ言ってきた。

——新自由クラブの中の空気は、どんなでしたか。

田川 新自由クラブの中は、ほとんど大平さんだったのではないですか。一人一人はかつてはみませんでした。河野洋平君は私と同じ考えでした。私のところには、三木（武夫）さんからの働きかけもありました。

——三木さんは何と行ってきたのですか。

田川 福田をやってくれと井出一太郎さんが訪ねてきて、議員会館で二回ばかり会いました。

——首班指名で大平さんが勝ち、第二次内閣の組閣のとき文部大臣のポストを空けていたのは、田川さんへの配慮だと言われていましたが、何か約束でもあったのですか。

### 首班指名をめぐる河野・大平の誓約書

田川 我々は無条件で大平さんに入れるとは言いませんでしたよ。小さいながらも政党だから大平さんを支持するならば、政党同士の約束をすべきだということで、大平さんのほうと話し合いました。政治姿勢、政治倫理、政策について話し合いました。最初は、大平さんから河野君に接触の申し入れがあったんです。あの時は河野君と一緒に聞いてくれと言うから、陣取っていたホテルで一緒に

大平さんからの電話を聞いた。大平さんとの話は記録にとっておかないと危いからということで、電話に録音器を取りつけました。そのくらいの慎重さでやりました。何度も電話で話をしているうちに、大平さんの話が首尾一貫してゐるんです。他の問題に移っても、大平さんが嘘を言ってる気配は見えないので、しまいいには電話を録音するのをやめてしまいましたが。その時の録音テープは、記念にとつてあります。この時のやりとりは、ほとんど電話です。大筋のところでは我々が大平さんに引きつけられたのは、自民党はだめだとおっしゃったことです。自民党のタカ派を追い出したい。そして公明党、あなた方、それに民社党に入ってもらつて政界の再編成をしたい、という気持ちを真剣に述べておられた。そのくらいの気持ちがあれば、大平さんはああいう態度には出られなかつたと思います。それは竹入君などからも、はね返ってくるんです。竹入君も我々に向つて大平さんに協力してやってくれ、と言ってくるんです。大平さんを支持するにあつて政策をまとめようということになり、私と佐々木義武君が中心になり、私のほうは鈴木恒男君や石川達男君に補佐してもらい、河野・大平の誓約書を作りました。この誓約書注も手元にあります。

「政治倫理確立のため政党法、情報公開法の制定と、政治献金の個人献金への移行」

「不公平税制の是正と国庫補助金の整理統合」

「公社公団など政府関係機関の整理統合」

「教育制度の見直し」の四項目の実現をはかるといふものです。

——この覚え書では新自由クラブと自民党の国会内新会派の結成まで書きながら、結局は削除してありますね。こういう動きがあつたからですか、第二次大平内閣の組閣で、田川さんの文部大臣含みで、

大平さんが文部大臣を兼任したということは。

田川 それは私がどうこうということではなくて、新自由クラブの協力があつて大平政権ができた場合どうするかということは、田中六助君が間に入っているいろいろやった。統一会派を作つてその担保に連立政権を作るといふ話も出たが、連立政権に誰が入るかは誰も口に出さない。私のほうはその場合、河野君が田川のどちらかだが、とにかく連立で担保を取つておかないと、大政党にまきこまれてしまうという気持ちはありました。でも、我々はそんなに連立を期待していなかった。というのは自民党がまとまりつこない。半分は割れてしまつている。大平さんが首班になれば、我々が手を貸したことになる。自民党内の反大平派は、大平に手を貸した新自由クラブと連立することに賛成するはずがない。だから期待していなかったというのが本心です。でも、できることならやつたほうが新自由クラブの存在感も示せるし、もし自民党から連立を言ってきたら応じても良いくらいの軽い気持ちでした。後から聞いた話では、大平さんは私を（内閣に）入れたかつたらいいですね。斉藤邦吉君なんか「大平とどういう関係なの」と聞いてくるくらいでした。大平さんは周辺に「田川は信頼できる」と言つていたということで、このことを聞いた時は嬉しかったです。

——党内に反対が多いのを知りながら、大平さんが文部大臣を空けておいたのはなぜですか。

### 田川文相の話は聞いていない

田川 それは分からない。私のほうでは山口敏夫君が連立をやリたがつていたので、さぐりを入れていたようだった。大平さんは、そういう点で軽々しく言わなかつたようですね。ただ記者会見で

「これからは連合連立の時代だ」と言っているのですよ。このことは事前に聞いていました。本当にやるかどうかは分らなかつた。私の名前が出たのは、すべてが終つてから関係者から流れてきたというだけです。私のほうとしては連立を組むということに、全く異存はありませんでしたが……。

——党内で首班指名候補を一本化できず、国会の場にまで党内対立を持ち込んで同じ政党から二人が立つという異常事態の収め方としては、すつきりしないものを感じますが……。

田川 敗けた方が自民党を飛び出すという形になれば連立問題も違つた形になつたでしょうが、憲政の常道からいって考えられない展開になつてしまつたのが、混乱の原因になつたのだと思います。

——大平さんと田川さんが親密な関係だつたことはよく分かりましたが、大平さんと河野さんはあまりしっくりいってなかつたと言われていますが……。

田川 私と大平さんほど親しくはなかつたが、決して悪くはなかつたですよ。

——河野さんが田川さんの文部大臣としての入閣に反対した、との見方もありますが……。

田川 入閣の話はすべてが終つてから、自民党の中で言い出したものです。私に対しては誰からも具体的な話は何もなかつたのですから、賛成とか反対とか言うはずはありません。

〔注〕

覚書

一、政治腐敗防止のため、政治論理確立の具体的方途として、政党法、情報公開法など必要な制度の制定を行なうとともに、政治献金は五年後を目途に個人献金に移行する。

二、いわゆる不公平税制を是正するとともに、各種国庫補助金の整理統合を含めた行政改革を断行する。こ

去 華 就 実

れが実現するまでは、低・中所得層などを対象とする増税はしない。

三、官民格差を是正するとともに、公社、公団、事業団をはじめ政府関係機関の整理統合と綱紀肅正を徹底して実施する。

四、すでに現状にそぐわなくなつた教育制度の見直しを行ない、文化政策の充実をはかる。

五、上記四項目について、大平正芳は、その実現に最善の努力をばらうものとする。

以上の合意にもとづき、これら緊急重要政策の実施を期するため、われわれはそれぞれ党内手続き等諸般の準備を進めることとし、大平正芳の首班実現に協力するものとする。

昭和五十四年十一月四日

大平正芳印

河野洋平印

田川誠一（たがわ・せいいち）

一九一八年、神奈川県生まれ。慶應

義塾大学卒。朝日新聞記者、松村謙三秘書を経て、六〇年衆議院議員に初

当選。自民党内にあつて松村氏、古井喜実氏らと日中国交正常化に動く。

七六年河野洋平氏らと自民党を離党し、新自由クラブを結成する。八三年

第二次中曽根康弘内閣（自民・新自く連立政権）に新自くを代表して自治

相・国家公安委員長として入閣。新自く解党後もただ一人自民党への復党

をこぼむ。著書に『日中交渉秘録』『自民脱党』など。